

社会人学生として学んだこと



2006年度 博士前期課程・2012年度 博士後期課程修了
長谷川 真照 さん

私が博士前期課程に進学して最初に感じたことは、学部生のころに比べて先生の求めているハードルが上がった事でした。学部生のころは言われたことを淡々とこなし、手法も、これまでの先輩が行ってきた内容を流用することが主でしたが、博士前期課程に進学することで、自分で調べ考えて先生および共同研究先の方とディスカッションしなくてはならなくなり、過去の先輩の手法のみでは解決できない問題も多々出てくるようになりました。また、学部生の後輩が出来たことにより、そちらの研究の面倒を見る必要も出てきたため、学部生時代とは全く違う環境におかれたと感じました。この時、私の励みになったことは、同じ総合学術研究科に進学されていた方々の存在でした。総合学術研究科には分野も年齢もバラバラな人たちが進学しておりますので、その方たちと仲良くなるが出来、社会人の方や他分野の方の話や考え方を聞くことが出来、とても参考や励みになり、人との繋がり大切さを実感しました。この状況を作るのに一役買ったのが、本学^{*1}で行われた授業や研究発表会であったと思います。研究を通して行いたいときには、本学^{*1}まで行くことがわずらわしく感じたこともありましたが、他の総合学術研究科所属の方々と交流が出来、皆さんと仲良くなるきっかけになったと思います。また、授業においても、薬学部では経験できなかった文系の授業を受けることが出来、視野が広がった気がします。この授業の経験は、現在働いている精神科のクリニックの門前薬局で活かすことが出来ていると思っています。さらに、各授業の参加人数は数人でしたので、緊張感もありましたが疑問に思ったことも気兼ねなくその場で聞け、ただ受けるだけとは違い楽しかったと思います。

博士前期課程に進学して最初のほうは、上述した以前との違いにより戸惑うことも多かったですが、周りの助けもあり徐々に自分で調べ考案提案できるようになりました。しかし、卒業までの2年間の研究ではネガティブデータばかりでポジティブな結果を出すことが出来ず、とてもつらい思いもしました。そのころは、あだ名もネタで“ネガティブ長谷川”となっていました。

このようなことがありましたが、卒業して企業の研究職に就職したときは、自分で調べ考案提案できるようになったことや結果が出なくてもへこたれないようになったことを活かして仕事をする事が出来ました。





企業に就職して1年経ったときに、自分がまだまだ未熟であることを感じスキルアップのために博士後期課程への進学を決めました・・・と、もっともらしく書いてみましたが、実際は先生からのお誘いがあった後、そんなに即決も出来ず悩んだ上、気付いたら外堀が埋まっていたのが正しいかもしれません。ある意味流れに流された感のある入学でしたが、入ってからは博士前期課程よりも厳しい現実が待ち構えていました。まず、以前の内容での共同研究が難しくなったこと等から、研究内容が前期課程とは全く異なる内容となり、全て一からの勉強となってしまいました。しかし、求められるのは博士後期課程としての能力や考え方でしたので、最初の研究のディスカッションからとても大変でした。また、仕事をしながらの研究でしたので、研究員の方や後輩、共同研究者の方にとってもご迷惑をおかけしてしまいました。こうして、何とか研究を進めることができ、結果が出た後、待っていたのは英語の投稿論文作成でした。もともと英語がとても苦手であることもあり、文章を書き始めるのにもとても苦労し、書いては先生に意味がわからないと駄目だしを受ける日々でした。その後、何とか先生からOKをもらい投稿しても、研究の意図や英文を理解してもらえず様々な酷評に晒され中々受理してもらえませんでした。結局様々なジャーナルに投稿し、受理してもらえたのは、論文の作成を開始してから1年半～2年経った時でした。今思い返しても、この論文作成が博士課程の中で一番辛かったです。しかし、この経験のおかげで、忍耐力が付き、様々なものの考え方を出来るようになりました。また、卒業するまでに辞めたいと思ったことは両手で数え切れないほどありますが、博士号を取得したことで仕事上付き合いのある方などからもより良い評価を頂き、今は諦めなくて良かったと思っています。

これまでは辛かった事を主に書いてしまいましたが、もちろん楽しかったことも沢山ありました。1つ目が研究室のセミナー旅行です。先生、先輩、同期、後輩と大人数で行くセミナー旅行はとても楽しかったですし、遊びだけではなく、アオコ採集やセミナー発表も行い、ただ遊ぶだけではなかったのも、今考えると良かったと思えます。セミナー旅行中のセミナー発表が終わった後の開放感は凄いです(笑)

2つ目は色々な方と交流することが出来たことです。上記でもあります総合学術内の方々

だけでなく、原田先生が交流の場を多々設けて下さいましたので、先生と関わりのある様々な方と交流することが出来、刺激を受けとても充実した学生生活を送ることが出来ました。また、お酒の席もしっかりあったのも良かったです(このため、お酒と話し方は研究室で覚えたといっても過言ではありません)。



今後も、博士課程で培った考え方や人とのつながりを大切にしながら仕事に活かしていきたいと思っています。

※1. 天白キャンパスのこと。八事キャンパスを拠点とする学生さんが良く使用される表現です。